Fanny PriceとMolly Gibson-
カントリー・ハウスの伝統を継承するヒロイン達

Fanny Price and Molly Gibson:
Bearers of the Country House Tradition

東京家政学院筑波短期大学
波多野葉子
Yoko Hatano
Tokyo Kasei Gakuin
Tsukuba Junior College

ジェーン・オースティン（Jane Austen）作『マンスフィールド・パーク』(*Mansfield Park*:1814)とエリザベス・ギャスケル（Elizabeth Gaskell）作『妻達と娘達』(*Wives and Daughters*:1864-6) には著しい類似点が存在し、それは作品のモチーフ、筋のみならず、舞台設定、登場人物の性格や果たす機能にまで及んでいる。[1] 特に中産階級出身のヒロインが、カントリー・ハウスに象徴される伝統的精神遺産の継承者としての資質の故に旧家に迎えられ、滅亡の危機に瀕した伝統精神の復活を助けるという筋は、産業革命により勢力を拡大しつつあった新興中産階級と土地を基盤とした伝統的支配階級の対立を背景にしており、19世紀の代表的時代思潮の文学的表象となっている。更に主人公の出世物語は、英国の階級制度に伝統的に存在したが、産業革命が加速した英国の階級制度の特徴である現象が下敷となっている。本論は両作品の類似点を検証することにより、両作品がこの時代思潮と英国に特徴的な階級制度が融合したものであることを論証することを目的とする。

両作品のモチーフは基盤を都市の資本に持つ新興中産階級と、田舎の土地に置く地主階級という新旧二大勢力の対立で、両作品は既に社会的、経済的に衰退の憂き目にあるばかりかその伝統的な精神遺産をも蝕まれつつある旧勢力が、存続を賭して新勢力の攻勢を防ぐ物語である。当然都市と田園の

対比は舞台設定と登場人物の性格設定の重要な要素となり、カントリー・ハウスに象徴される伝統的精神遺産は、非地主階級出身ながら伝統的価値観に支えられ“the lady of the manor”となる資質を持つファニー・プライス及びモリー・ギブソンの力で、新勢力に屈するのを寸前で免れその存続を維持していく。当然都市文明に汚染されたメアリ・クローフォードとシンシア・カークパトリックの人物設定は、ファニー及びモリーと対照をなし、それは同時に田舎対都市の構図を形成している。つまりファニーとモリーは田舎とその伝統を、メアリとシンシアは都会と都市文化を具現していると言えよう。従って由緒あるトーリーの一門の伝統遺産を受け継ぐエドモンド・バートラムとロジャー・ハムリーそれぞれのメアリとシンシアへの執着は、伝統遺産が都市の文化に屈伏しかけたことを示し、二人のファニーとモリーとの結婚という結末は、田園の伝統への復帰を意味する。当然この三角関係は両作品のプロットの展開、及び人物設定に重要な役割を果たしている。

実際主人公と都市志向の娘の性格は鮮明な対照をなしている。『マンスフィールド・パーク』では、ファニーは自然の癒す力が人間性に与える道徳的影響の故に、自然の人工への優位性を認めているが、メアリは生来都市志向で、“decided preference of a London life”[2]を有している。フライシュマン(A. Fleishman)は述べる－“Jane Austen labors to ascribe to her a Johnsonian preference for the city to the country－not merely a taste for urban high society but a conscious choice of civilization over nature.”[3]そしてメアリの農村社会への無理解と地主階級の一員としての責任感の欠如は、ハープのエピソードに明らかである。自己の楽しみを追求し、農繁期に馬と荷車でハープを運ばせようとした彼女は、その結果、“all the farmers, all the labourers, all the hay in the parish”(*MP* 48)の感情を損ねてしまう。又、彼女が田園社会での聖職者の果たす役割が理解できないことは、叙階を望むエドモンドに異を唱えるくだりに良く表れている。エドモンドの決意に驚愕したメアリは、“You assign greater consequence to the clergyman than one has been used to hear given. . . .”(74-5)と反論する。地主と聖職者は伝統的田園社会には不可欠な構成要素であったことを考えると、メアリのこうした反応は、彼女の無知と特権階級の一員としての自覚の欠如を物語っている。彼女は“with an ethos of refined nihilism － as the exemplar of aristocratic decadence”(30-1)として描かれている、というフライシュマンの言葉は正鵠を射たものと言えよう。一方メアリとは対照的にファニーは、

不在地主であるヘンリー・クローフォードに地主としての自覚を与え、彼は遂には領地でパターナリストとしての責務を遂行しようとするまでに変貌を遂げる— "He had introduced himself to some tenants, whom he had never seen before; he had begun making acquaintance with cottages whose very existence, though on his own estate, had been hitherto unknown to him" (*MP* 315-6). そしてパターナリストとしての地主階級の役割を何よりも重要視するファニーは、ヘンリーの変化を心から喜ぶのである。

ファニーとメアリはまた、伝統と過去に対しても対照的な態度を示す。ファニーは昔から伝わるものに興味と愛着を示し、その保存に大きな関心を持つ。従ってエリザベス朝から存続するサザトン邸の訪問を切望し、訪問の折には由緒ある屋敷に尊敬の念を覚え、夫人の説明に熱心に聞き入る。更に、過去の情景に思いを馳せ想像を膨らませることに無上の喜びを覚える。ところがメアリは無礼にならないように聴くのみであった。またサザトンの古い並木を切るラッシュワース氏の計画を聞き、ファニーはクーパー (William Cowper)を引用して嘆きを表す— "Ye fallen avenues, once more I mourn your fate unmerited"(46). この点に関してダックワース(Alistair Duckworth)の次の主張は示唆に富んでいる— "The trees . . . have provided an emblem of organic growth throughout English literature. . . . On the other hand, the cutting down of trees has suggested a radical break with the past. . . ."[4] 従って並木伐採に対するファニーの否定的な反応には、過去を敬い古き良きものの存続を願う心が察知できよう。ならば彼女が、変化、改造を嫌い、ヘンリーのソーントン改造計画に反対するのは当然と言えよう。更にダックワースの "In terms of a value system that is to be found throughout Jane Austen's fiction, Thornton is a substantial and healthy estate."(53)との主張は、ファニーの反応の健全さを裏付ける。当然彼女のヘンリーに向けられた視線は、深刻さを通り越して責めるようであった。一方メアリは兄を "such a capital improver"(191)と賞賛するのである。

『妻達と娘達』においてもモリーとシンシアの性格設定には、明白な田舎対都会の構図が見てとれる。まず趣味や好みにおいて二人は対照的な差を見せるが、モリーの田舎志向は既に彼女が初めてハムリー家を訪問した折に、牧歌的風景に感銘を受けることに明かに現れている—

A flower-garden right below; a meadow of ripe grass just beyond, changing colour in long sweeps, as the soft wind blew over it; great old forest trees a little on one side; and, beyond them again . . . the silver shimmer of a mere. . . . The deliciousness of the early summer silence was only broken by the song of the birds, and the nearer hum of bees. Listening to these sounds, which enhanced the exquisite sense of stillness, and puzzling out objects obscured by distance or shadow, Molly forgot herself. . . . [5]

クレイク(W. A. Craik)の指摘するモリーの "sensuous responses to the natural scene . . . for which she has always had an unostentatiously Wordsworthian enthusiasm" (257-8) は、サザトン邸訪問の際にファニーがみせた自然の力を賛美するロマン派的趣味と相似する。また二人のロマン派的傾向は文学の好みにも反映されており、ファニーはクーパーやスコットを引用し、モリーはハムリー家の書斎のスコットの小説を読み耽ける。モリーのこうした傾向はさらに、ハムリー家の時代遅れではあるが、上質の材質で作られ手入れの行き届いた家具やしつらえへの愛着へと繋がっていくが、それも家具がギブソン家のものと同質とあらば当然であろう。ここでもモリーの古い物を慈しむ心は、サザトンでのファニーの反応と呼応する。そしてハムリー家の豊かな自然と伝統と歴史に囲まれて第一日が閉じた時に、"the sounds of the solitary corncrake, and the owl hooting in the trees"(102)を聞きながら、これからのハムリー・ホールでの暮らしに良い予感を覚えるのであった。

モリーのこうした田舎志向は美意識のみならず精神面にも見られるが、それは田園精神の権化であるスクワイア・ハムリーが彼女の価値を認めたことが雄弁に物語っている。実際ハムリー家はその古い家柄故に、田舎が連想させる伝統と過去を象徴している。現にホイッグの貴族であるクムナー家の歴史が浅いことは、レィディ・ハリエット自らが認めている。クムナー家より遥かに古い家系を誇るハムリー家の当主に認められたことは、古い英国の伝統と過去の遺産の継承者としてのモリーの資格を証明するものにほかならない。

一方シンシアがメアリ・クローフォード程極端ではないが、同じく都市志向の持主であることは、彼女が "very ready to be easily persuaded into

the perpetual small gaieties which abounded in her uncle's house in London, even at this dead season of the year"(556)であることから窺える。また田舎が継続と安定を示唆するのに対して都会は変化を象徴するので、彼女の度重なる心変りは彼女が都市のエトスを持っていることを暗示する。とすれば最後にロンドンの弁護士とロンドンで結婚するのも首肯ける。そして彼女の選択の基準が伝統的価値観から逸脱することは、レィディ・クムナーの "there is a general prejudice against attorneys."(662)との言葉が示唆している。とりわけハムリー・ホールの精神を受け継ぐロジヤーを裏切りヘンダーソンを選んだことは、彼女が田舎と伝統を理解しないばかりか、彼女の軽薄な好みと価値観を示しており、実際ギブソン氏も、"I don't wonder she preferred him [Henderson] to Roger Hamley. Such scents! such gloves! And then his hair and his cravat!"(658)と述べ笑っている。従って彼女はロジャーのような "people of deep feelings"(656)は好まず、もしロジャーと結婚したなら彼に飽きてしまうであろう、という彼女の予感は的中していたことであろう。当然彼女には、まもなくヨーロッパ中で名声を馳せるであろう彼の優れた資質を理解することは無理であった。またロンドンに親戚が住んでいることはそれ自体悪いことではないが、彼女がロンドンに帰属することを示唆する。現に叔父は、結婚式が自分の家から執り行われることを勧めるのである。かたやモリーは田舎町に住み、ハムリー村の古い家系を誇るトーリーの郷士であるハムリー家との交友を通じ成長する。つまりホリングフォード卿が称するように、彼女は "good little country girl"(676)そのものと言えよう。

こうして様々な面に窺えるファニーとモリーの田舎のエトスは、メアリとシンシアの具現する都市文化と対照をなすが、それが単に好みに留まらず人間性にも大きな影響を及ぼしている点が重要である。例えばファニーは、"in observing the appearance of the country, the bearings of the roads, the difference of soil, the state of the harvest, the cottages, the cattle, the children" (*MP* 66) に喜びを感じるが、それは彼女の良き "Lady Bountiful" としての素質を如実に示している。ところが、"Miss Crawford was very unlike her. She had none of Fanny's delicacy of taste, of mind, of feelings; she saw nature, inanimate nature, with little observation. . . . " と語り手はファニーに軍配を挙げ、メアリの自然への無関心を批判している。こうした彼女の態度は、既に述べたハープのエピソードやエドモンドの叙階

への反対、そして不道徳的な芝居の練習に積極的であることに繋がる。

同様にモリーとシンシアの性格も際だった対照を見せる。まずモリーは "clear conscience and her brave heart" (*WD* 573) を持ち、謙虚で思いやり深く、正直である。そしてギブソン氏が評するように節操が固く、一旦愛したらシンシアのように簡単に愛情を移すような娘ではない。そうした徳は、自らの名誉を犠牲にしてシンシアの為にプレストンと対決した時に如実に表れるが、モリーの勇気と静かに屈辱に耐える姿をレィディ・ハリエットは的確に "the child is truth itself. . . I both like and respect her. . . . "(578)と評価している。一方シンシアは元来優しい気持ちの持主ではあるが、変りやすく、人の歓心を買おうとし秘密主義であるばかりか、母から見ても "flirt"(592) するのは性格上避けられない。従ってプレストンと婚約していながら、ロジャーとも婚約した上、あたかも気があるような素振りでコックスの気をも引いた後、ヘンダーソンからも求婚される程節操がない。彼女も自らの不誠実な性格を認めつつ、自分は人に好かれたい気持が強く身近な人全てに好かれるよう振舞ってしまうが、相手の想いが強くなると煩わしくなり身を引きたくなってしまう、と弁解する。彼女自身の言葉は、彼女は主義が欠如し人を傷つけるのも厭わない自愛心の塊であることを示す。そうした軽薄な変りやすい自己中心性は、母からの遺伝でもあり、満たされなかった子供時代の所産でもあるのだが、モリーの忍耐心、勇気、愛、そして "steady disposition" (389) と両極をなしている。所詮シンシアの華やかさは、"rather the glitter of the pieces of a broken mirror, which confuses and bewilders" なのであり、ロジャーが最後に気付いたように、モリーより劣っていることは明白である。従ってどちらの作品でも、田舎を好む主人公に優れた人間性が付与されているばかりか、彼女達は都市志向のライバルに良い影響を及ぼす。その結果シンシアはモリーに "I've never lived with people with such a high standard of conduct before. . . ." (456) と述べ、自分のモラルが劣っていることを悟る。同様にメアリはファニーといると人格が改善されることに気付く。これは田舎が持つ人間性に与える良い影響を示唆するもので、この図式は両作品で田舎が都会より優れた属性を付与されていることを示す。

このように優れた属性をもつ田舎が抗し難い都会の魅力に喘ぐ様を、三角関係は如実に描いている。"careless and extravagant" (*MP* 19) である長男とは異なり、"strong good sense and uprightness of mind" を持つエド

モンドは、地主階級の精神遺産を守る若い世代の最後の砦であったが、メアリに執着する余り新勢力を象徴する芝居の稽古の悪い点が分らず、サー・トマス帰還後、ファニーのみが一貫して正しい判断を下していた、と報告することになる。同じ点がロジャーにも完全に当てはまる。父が長男ではないが所領に興味を持っていると評し頼りにしていた彼は、"a strong built cheerful, intelligent country farmer" (*WD* 216)の風貌を持ち、ハムリー・ホールの伝統を維持する能力に恵まれていた。しかしモリーより魅惑的なシンシアに恋してしまう。こうして次男ではあるが伝統的精神遺産を受け継ぐ資質を備えた二人が、外見の華やかな女性に夢中になり、都市のエトスに惑わされてしまうのである。

精神的相続者の都市を象徴する女性への執心の機能は、旧勢力の危機的状況を描くことにある。どちらの作品でも長男は既に新勢力に屈し、由緒ある家系の精神遺産の存続は、長男相続制度の故に地位も財産も継げない次男にかかっている。そうした状況の下での都市の価値観を持つ女性への愛着は、田園社会の伝統の完膚な崩壊が迫ったことを暗示している。もし三角関係が伝統遺産を相続する器量のない長男との間に起きていたのなら、これほどの危機感を包合しはすまい。まさにマンスフィールドとハムリー・ホールに象徴される"Old England"は瀕死の状態であり、共に精神、経済両面の問題を抱えていたのである。

まず精神的問題は両家共に長男が伝統を継承する素質に欠け、繁栄の可能性の少ないことに露見している。たとえ牧師館とグレート・ハウスが近接していることで、エドモンドが在住の良き牧師となることが予見できても、本家の運命はトムの手にあっては楽観できない。またハムリー家も、ロジャーがダーウイニズムを連想させる新しい学問で名声を馳せようとも、ハムリー・ホール自体の繁栄は疑わしい。アルフレッド大王時代以前から続いた旧家は新しい時代の象徴する学問を追及し、田園の伝統から離れた所で生き延びるしか道はないといえよう。そもそも両家は長男の教育を誤ってしまった。トム は、"robbed Edmund for ten, twenty, thirty years, perhaps for life, of more than half the income which ought to be his."(*MP* 21)程の散財癖が示唆するように、地主階級の長男としての自覚が皆無な青年である。オズボーン・ハムリーにはトムより作者の好意が感じられるが、身分相応の教育が蔑ろにされたことには変りはない。ランズベリー(Coral Lansbury)は、"Mrs. Hamley has taught Osborne to be oblivious to the material aspects

of the countryside and to devote himself to its aesthetic qualities. . . ."[6] と指摘しているが、スクワイアとて同罪で、オズボーンの学問的成功に期待していた頃、 彼の気難しさや優雅さを由緒あるハムリー家を再興してくれるような良縁への一歩と考え、彼を甘やかしていたのであった。その結果オズボーンはケンブリッジで失敗し負債を残したばかりでなく、最後にはカトリックでフランス人の召使に生ませた混血の男子を残して世を去ることになった。これ自体でもハムリー家には打撃であったが、彼の負債は既に没落しかけていた家を更に窮地に追い込んでしまう。彼の教育は予期せぬ出費の原因となった好みの難しさと共に多額の出費をもたらし、ハムリー家の基盤を更に脆弱にしたのである。このように両家共、長男は精神的危機のみならず経済的危機を引き起こす。

しかし両家には更に根本的な経済問題が内在していた。スクワイア・ハムリーは工業化のもたらした変化に追いつけず、一家は困窮していた。ランズベリーはその経緯を、"a man like Squire Hamley was becoming anomalous in English agricultural life. He was unable to dispose of his property because of entails and family sentiment."(184) と説明する。つまり新しい耕作法や作物を導入して収穫嵩を増やしたり、家畜や農作物の品種改良で増益を図った当時よくいた "improving landlord" や、炭鉱や工場を経営する企業家には変貌できず、変遷する時代を生き延びるべく財産を増やすことができなかったのである。彼が頻繁にハムリー家の旧い起源に言及しクムナー家の歴史が浅いことを耶揄するのは、優越感ばかりでなく、嫉妬と焦燥感の表れに他ならない。

同じようにバートラム家も新しい時代故の経済的問題を抱えていた。マンスフィールドの所領はバートラム家の贅沢な暮らしを支えるのには十分ではなく、植民地からの収入に頼っていたのである。ウエッブ(Igor Webb)は述べる— "The most important and most perplexing historical fact of the novel is that the estate of Sir Thomas Bertram depends on a sugar plantation in the West Indian island of Antigua."[7] 実際、古き良き農村の共同体は唯一地元の農業に支えられており、地主階級が重商主義と無縁であると言うのは、文学上の神話にすぎない。史実はシェリダン (Richard B. Sheridan) から引用しよう— "the improving landlords of 18th century England and Scotland derived their wealth from colonial property, mineral rights, and urban rents rather than the profits of agriculture."[8]

そして17世紀や18世紀にはカリブの砂糖産業が新しい富の源となっていたので、バートラム家もその恩恵に浴していたと設定されていたと考えても無理はないであろう。実際彼らの富と快適な生活が植民地の荘園に頼っていたことは、ノリス夫人が明らかにしている— "Why, you know Sir Thomas's means will be rather straitened, if the Antigua estate is to make such poor returns"(*MP* 26). 実はその時は既にマンスフィールドの経済状態は、長男の浪費と西インド諸島の荘園での損失により悪化していたのであった。まさに問題が累積した植民地での搾取の上に成り立つマンスフィールドの贅沢な生活は安泰からはほど遠く、土台が腐食しかかっていたのである。

そして快適なマンスフィールドの暮らしを脅かすものは、まさに新しい時代の意識の創造物の反奴隷制運動であった。西インド諸島では奴隷の扱いが残虐を極め、彼らは文字通り酷使され使い切られた挙げ句、新しく連れてこられた奴隷で補充されるという状態であった。奴隷貿易の廃止で既にいる奴隷に子孫を造らせる必要性が生じたが、奴隷の健康状態に留意することは、思うように荘園の管理ができない不在地主には不可能であった。そして干ばつによる凶作に追い打ちを駆けられ、財政破綻の水際で苦しむ不在地主達がいたので、サー・トマスの状況もこれに類して設定されていたと考えても無理はなかろう。

このように両家共精神、経済両面の問題に悩んでいたが、ファニーとモリーを迎え、少なくとも伝統的精神遺産は死守することになる。従って当初存在価値の薄かった二人は、両家にとり不可欠の人物へと変貌を遂げる。物語の初めにサー・トマスは息子達とファニーが恋仲になるのを懸念し、彼女を引き取るのをためらう。そして娘達とは身分が違うのだから、"she is not a *Miss Bertram*"(*MP* 11)であることを悟らせるべく扱うよう求める。この延長線上にはファニーの身分では息子達の相手として適しくないという考えが窺えよう。そしてスクワイア・ハムリーも当初同様の懸念を表明する— "It would never do him [Osborne] to fall in love with Gibson's daughter — I shouldn't allow it." (*WD* 88) —なぜなら由緒あるハムリー家の長男として、どんな良縁も望めると父は考えていたからである。そして所領を相続できないロジャーには財産家の娘との結婚を望んでいた。とはいえスクワイアの "honourable blood" (436) への偏愛はシンシアに上流階級の血が流れていることを知る時に顕れる。結局血筋も財産もないモリーよりシンシアの方が、息子の妻として望ましいのであった。

このように、サー・トマスもスクワイア・ハムリーもファニーとモリーの低い身分が気になり、そのことが両家での二人の扱いに影響を及ぼす。特にファニーはノリス夫人の粗雑な扱いが象徴するように、最も存在意義の低い者として扱われ、当初はエドモンド以外からは無視されることが常であった。しかし役に立ちたいとの願いや感謝の念を常に持っていたので、まもなくバートラム夫人にとって手放せない姪となり、更に自分の娘達の教育を誤ったことに気づき、その低俗な人格に失望したサー・トマスの信頼を得るようになる。地主階級に必要な義務感を教えこまれておらず、自己の欲望のみを追及する女性となり、都市の文化に汚染されてしまった娘達とは対照的に、ファニーは気だてが優しいばかりか、確固とした主義主張、一貫性、強い義務感を持っていた。まさに彼女にはダックワースが述べるように、本能的な義務感があり、それはマンスフィールドの伝統文化の存続には欠かせないものであった(71-2)。従って、最後にサー・トマスは "Fanny was indeed the daughter that he wanted"(*MP* 368)と感じるのである。まさに当初屋根裏部屋に置かれた部外者の彼女はマンスフィールドの伝統的価値観を回復させることにより、最も価値のある人物へと変化し、周辺から中心へと移動したのである。

モリーも同様な変化をする。クレイクが主張するように、確かにモリーの場合はファニー程 "neglected, her worth unacknowledged, helpless and isolated" (247)ではない。しかし息子達の妻としては不適当として彼女を見なしていたスクワイアが、最後にはロジャーに彼女を薦めるのは、彼女の存在意義が増しハムリー家にとって不可欠になったことにほかならない。"... I dare say I should ha'been angry enough at the time, but the lassie would ha'found her way to my heart.... don't you think you could turn your thoughts upon Molly Gibson, Roger?" (*WD* 688) また初めはハムリー夫人の愛情を得ていたことも、ファニーの場合と重なる。そしてそれがスクワイアへにも伝わり、最後に彼はサー・トマスの気持ちと全く同じ内容の言葉を発する— "... I look upon you as a kind of daughter more than madam there!"(684). こうしてファニーもモリーも元来中産階級の出身でありながら、地主階級に伝統的な徳を持っていたために、両家の戸主に認められたのであった。

ファニーとモリーの徳と価値観は、二人の優れた判断力、他人への思いやり、主義主張の一貫性、気丈さに表れており、一見「家庭の天使」と間違わ

れる程の優しく従順な性格の下には、不正や誤った判断には妥協しない強さを秘めている。まずファニーは優れた判断力と高潔な精神の故に、一族の人望を集めていたエドモンドさえ敵わない主義を曲げない性格を芝居のエピソードで見せ、ヘンリーのプロポーズをあく迄も退けて、周囲の圧力に負けない気丈さを露にする。この縁談は世俗的にはサー・トマスが述べるように、二度と巡っては来ない "eligibly, honourably, nobly"(*MP* 247)に身を固められる、いわば玉の輿に乗る機会であるので、ファニーはサー・トマスの不興をかい、一時的に実家に戻されてしまう。彼女の "independence of spirit" は "wilful and perverse" と非難されるが、それも彼が彼女を含めてプライス家にしてくれたことを思えば当然と言えよう。バンフィールド(Ann Banfield)が述べるように、恩人でもあり身分が上でもある人に逆らうオースティンのヒロインは、他には見当たらない。[9] 当然天使のように優しいファニーのこの強さは周囲には驚愕をもって受けとられ、常に味方をしてくれるエドモンドでさえ、"so very determined and positive! This is not like yourself, your rational self!"(*MP* 270)と驚きの言葉を発する。

モリーのファニーに劣らない気丈さは、シンシアの手紙を取り返すために自らの評判を犠牲にしてプレストンと対峙する時によく表れる。そして彼女の勇気、正義感、シンシアを思う心、強かさに、卑劣な彼でさえ感動を覚える— "He forgot himself for an instant in admiration of her. There she stood, frightened, yet brave, not letting go her hold on what she meant to do, even when things seemed most against her. . ." (*WD* 533). またモリーの尋常でない気丈さは、レデイ・ハリエットが姉妹を耶揄したことに怒りを覚え、彼女がブラウニング姉妹宅にモリーを訪ねようとするのを、はっきり断る時にも表れる。ヴィクトリア朝のような身分社会では、並の娘であったらそのような申し出を誇りにこそ思え、断ることなど夢にも思わなかったことであろう。

実はモリーは既に子供の頃から強さを垣間見せていた。召使のベスが家庭教師に無礼な口をきくと、モリーは激昂して彼女を庇い、さしものベスも怯んだものであった。モリー自身成長してから、自分の烈しい気性に気がつく。しかし分別と知性がそれを勇気のある性格へと変えたのであった。

モリーの知性が烈しい気性を、均衡のとれた、公正を愛し、理性的で独立心に富んだ性格に作り変えたことは重要である。彼女は子供の頃学ぶ意志が旺盛であった。しかし父が女子には学問は不要と考え彼女の知的な試みを全

て妨害した為、内容のいかんに拘らず手に入るものを手当り次第に読んで、知的好奇心を満足させる他なかった。そのような状況から引き上げてくれたのはロジャーである。彼がそれ迄彼女が読んでいたフィクションや詩より高邁な内容の本に興味を持たせた結果、彼女は彼の最も有望な生徒に成長したのである。その様なモリーの知性はホリングフォード卿にも認められ、「彼女は知的で、全ての高尚なことに興味を示す」と評されるまでになる。このような知性と先天的強さが最も表れたのが、プレストンと対決した時といえよう。ランズベリーのモリーの "goodness is not passive, a denial of action, but the positive force in the novel."(204)という主張は真に正しい。そしてファニーもモリー同様読書が好きで、思えば彼女の精神もエドモンドに育まれた感がある。実際彼は彼女の知性と読書欲を見抜き、彼女の読書指導をして彼女の知性や判断力を高めたのである。

この様にして身につけた教養と知性で天賦の資質を研き、ファニーもモリーも由緒ある家で高く評価されるようになる。ここで大事なことは、二人の徳は地主階級の女性が伝統的に持っていたものであるということである。歴史を紐解くと、ジェントル・ウーマンは従順な「天使」などではなく、夫の留守などには必要ならば敵と武器をもって戦うほど勇ましい女性達であった。また所領や使用人の管理にも采配を振るい貧しい者の面倒も見たし、学問を好み知性の高い女性も特にエリザベス一世の宮廷には多かったのである。[10] 従ってファニーとモリーの気丈さ、知性、身分が下の者や、困窮者の面倒を見る態度は、地主階級の女性に伝統的なもので、特にそのパターナリスト的態度は、"Lady Bountiful" としての資質を示していると言えよう。元来 "*noblesse oblige*" は英国地主階級の理想とするもので、"the lady of the manor" になる必須の条件であったのである。

これまで明らかになったように、両作品の類似点は、田舎と都市の対立をモチーフにして描かれているが、この対立は産業革命への拒絶反応の産物である。言うまでもなく産業革命は、物理的に自然を破壊したばかりか、資本を基盤とした新興中産階級に、土地を基盤とした地主階級の覇権を脅かすほどの力を与え、社会、経済機構のみならず、価値観、習慣等も変えようとしていた。当然人々は喪失感にさいなまれ、新旧勢力の対比には敏感になり、産業革命以前の牧歌的風景の残る過去に回帰願望をもつようになった。そして失われたエデンの園として過去を理想化し、ノスタルジアに耽けるようになったのである。この脅迫観念にも似た心理は、「中世主義」(medievalism)

と呼ばれ、19世紀英国の様々な面に足跡を記した。例えば、政治面ではディズレイリ(Benjamin Disraeli)率いる若きトーリー党員で構成されるYoung Englandが、宗教ではニューマン(John Newman)らのオックスフォード運動、建築ではピュージン(Augustus Pugin)を中心とするゴシック・リヴァイヴァル, 芸術ではラファエル前派があげられる。また文学ではアーサー王伝説を再現したテニスン(Alfred Tennyson)の『国王牧歌』(*Idylls of the King*: 1859)が有名であるが、トロロープ(Anthony Trollope)のバーセットシャー・シリーズも中世懐古主義を色濃く反映した作品群であり、作中随所に窺える彼のトーリー主義はディズレイリとも一脈通じる。さらにカーライル(Thomas Carlyle)、ラスキン(John Ruskin)、そしてモリス(William Morris)も中世主義の強力な信奉者であった。"medievalism" についてチャンドラー(Alice Chandler)は述べる—

> Starting as far back as the Elizabethan era . . . the study of the Middle Ages had continued to develop throughout the seventeenth and eighteenth centuries. Scott brought this interest to a focus by creating a completely believable medieval world, which he portrayed so vividly and attractively that many of his readers took it for historical truth rather than historical fiction. . . . Neither Scott nor the later medievalists would have been able to popularize the Middle Ages, however, were it not for the era in which they wrote.[11]

従って中世懐古主義は広範な工業化がなくては、これ程まで浸透しえなかったであろう。その点で時代の申し子であり、オースティンとギャスケルにも影響を与え、『マンスフィールド・パーク』と『妻達と娘達』も中世主義を反映した作品となったのである。両作品は共にカントリー・ハウスを舞台にして衰退しつつあるトーリーの旧家が新勢力の侵略に存続を賭して掻く様を描いた、滅びゆく古い体制へのエレジーと言えよう。

両作品に共通する主人公の地主階級への出世物語は、優れて英国的な階級制度を基礎として構成されているが、やはり工業化が促進したものである。大陸諸国と比べると、英国は伝統的に階級間の移動に寛容であった。事実トクヴィル(Alexis de Tocqueville)は、大陸諸国と比較して英国の階級制度が開放的なことに驚いている。[12]又レトウィン(Shirley Letwin)によると、中世

初期から英国には階層間の移動が見られ、階級の区別は混乱状態にあった。その結果確信をもって自分の先祖について誇れる英国人は存在しないという。実際エリザベス一世の六代前は農奴であったそうだ。[13] ブリッグス(Asa Briggs)はこの許容性を 'removable inequality'[14] と称しているが、産業革命を最初に起こし世界の工場となった英国には、以前から重商主義の萌芽が芽生えていたことであろう。ならば経済力を持つ中産階級の勢力を無視することは不可能であったに違いない。こうした出世の可能性が、シティで成功を修めた中産階級が田舎に住居を求め、カントリー・ジェントルマンの暮らし振りを真似るのが常となった事情を説明する。なにしろカントリー・ジェントルマンは英国人の究極の理想像なのである。トンプソン(F. M. L. Thompson)によると、新興中産階級が商業的成功を遂げた場を退き、完全なカントリー・ジェントルマンとして田舎に落ち着く迄には、二世代または半世紀待たなければならなかったという。[15] そして、富を得、息子をオックスブリッジで教育しジェントリーの外見を整えた彼らは、更なる飛躍を願い、良い血筋を得んが為階層を越えた結婚を望み、名実共にジェントリー化を図ったのである。

このジェントリー同化願望は、当然地主階級への好感情(gentriphilia)を生み出した。[16] 自分が特権階級に加わる可能性があるのなら、体制を転覆させるより、それに与みした方が遥かに理に適っていたからである。この心理は体制の安定に多大の貢献をし、仏革命に相当するものが英国に起こらなかった一因とも考えられている。実際チャーチスト運動の嵐が吹き荒れた1840年代でさえ、活動家は革命より漸進な変化を望んだのであった。さらに20世紀に至っては、生産現場や商業を嫌う性癖が経済停滞を生み出した。[17] この様にジェントリー同化願望が、既存の権力の安寧に貢献したことに明らかなように、階層間の可動性は一見被支配階級に益をもたらしたかのようで、実は支配階級に有利な慣習であった。その他にも産業革命による社会、経済機構の変化に取り残され没落の道を辿る地主階級には願ってもない救済手段であったし、なにより血族結婚の弊害を防ぐという大きな利点があった。連綿と続き弾性と生命力が萎えた家系に、上昇志向に燃え活力に満ちた血を注ぎ、肉体的にも精神的にも再度生命力を与え、激動の時代を生き抜くことを可能にさせたのである。この "blood restoration"[18] は、支配階級が可動性のある階級制度から得た大きな収穫であろう。そして労働者階級から中産階級へ、更に地主階級へと出世する可能性を、産業革命が促進したことは想像

に難くない。

中産階級出身のファニーとモリーの出世物語は、まさにこの“blood restoration”の典型と言えよう。なるほど二人が旧家に迎えられたのは財産故にではなく徳によるものであり、そこには地主階級と結婚できるほどの財力に恵まれない中流の女性読者層のジェントリー同化願望が反映されていると思われるが、ともあれ二人の新しい血により、バートラム家とハムリー家はカントリー・ハウスに象徴される伝統精神を保つことができるのである。タナー(Tony Tanner)が“without going outside to the unformed world of Portsmouth for fresh potential, the world of Mansfield Park may wither from within.”[19]と述べるように、マンスフィールドはファニーの新しい血がなくては朽ちるばかりであった。同じことがハムリー・ホールとモリーの関係にも当てはまる。つまりファニーとモリーは、非地主階級の出身ではあるが、新勢力の作り出した都市の文化に汚染されず、地主階級の女性の伝統的徳を備えていたために、旧家の戸主に認められ、その一員となる。エドモンドもロジャーも次男である為に、ファニーもモリーも本家の夫人とはなりえないが、二人により伝統的精神遺産が継承されていくのである。

従ってファニーとモリーの出世物語は、新勢力の攻勢に脅威を覚えた19世紀の人々の喪失感と“Old England”への郷愁の産物である中世主義が、“blood restoration”と融合してできたものであると言えよう。そしてカントリー・ハウスの伝統の継承者として非地主階級の娘が選ばれる作品は数多く存在し、この心理構造が広く浸透していたことを示している。例えばトロロープの『ドクター・ソーン』(*Doctor Thorne*：1858),『フラムリー牧師館』(*Framley Parsonage*：1861),『最後のバーセット年代記』(*The Last Chronicle of Barset*：1867),またジョージ・エリオット(George Eliot)の『ミドルマーチ』(*Middlemarch*：1871)も変型ではあるがこの範疇に属する。そして驚くべきことに、都市から文学的インスピレーションを得ていたと言われるディケンズ(Charles Dickens)さえも、『荒涼館』(*Bleak House*：1853)で下の階級の娘をカントリー・ハウスの夫人に出世させている。[20]ファニーとモリーの出世物語がこの一連の作品の系譜に属するものであるのは言うまでもない。二人の若く生命力に溢れた新しい血を得て、新勢力の攻勢に衰退の危機に瀕したトーリーの名門は、少なくともカントリー・ハウスが象徴する伝統精神の存続は死守するのである。その意味で『マンスフィールド・パーク』も『妻達と娘達』も、滅びゆく地主階級の伝統と価値観を継承する新

しい血を持った女性を探求する作品と言えよう。まさに両作品は19世紀を代表する時代思潮である中世懐古という去りゆくものへの哀惜の念と、可動性を許容する階級制度が生み出した "blood restoration" という一見矛盾する二つの現象が融合し、文学作品として結実したものなのである。

注

本稿は日本ギャスケル協会第6回例会(1994年6月4日)の講演の原稿に加筆したもので、1994年8月にテキサス大学ダラス校で承認された博士論文(題："'The Admirable Woman' and the Barsetshire Tradition")の一部を基にしたものである。

1. W.A. Craikはモリーとファニーの類似性を*Elizabeth Gaskell and the English Provincial Novel* (London: Methuen, 1975) 257頁で述べている。しかし、三角関係を形作る三人の性格とモラルは異なるというクレイクの主張(p. 247)は、筆者とは見解を異にしている。程度の差こそあるものの、両作品の3人は性格、身分が対応しているばかりか、その設定により同じ機能を持つ三角関係を作り出しており、それが筋の展開を推進すると同時に作品のモチーフをも支えているからである。
2. Jane Austen, *Mansfield Park* (1814; New York: New American Library, 1979)199. 以後本作品からの引用は全てこの版により、必要ならば引用末尾の括弧内に*MP*と略記し頁数を記す。
3. A. Fleishman, *A Reading of Mansfield Park* (Minneapolis: U of Minnesota P., 1967) 30.
4. Alistair M. Duckworth, *The Improvement of the Estate* (Baltimore: The Johns Hopkins P., 1971) 53.
5. Elizabeth Gaskell, *Wives and Daughters* (1864-6; Harmondsworth: Penguin, 1980) 95. 以後本作品からの引用は全てこの版により、必要ならば引用末尾の括弧内に*WD*と略記し頁数を記す。
6. Coral Lansbury, *Elizabeth Gaskell: The Novel of Social Crisis* (New York: Barnes & Noble, 1975) 193.
7. Igor Webb, *From Custom to Capital* (Ithaca: Cornell UP, 1981) 106.干ばつに関しては、p.107参照。
8. Richard B. Sheridan, *Sugar and Slavery: An Economic History of the*

British West Indies, 1623-1775 (Baltimore: Johns Hopkins Press, 1973) 474. Webb p.106 に引用。

9. Ann Banfield, "The Influence of Place: Jane Austen and the Novel of Social Consciousness," *Jane Austen in a Social Context*, ed. David Monagham (Totowa, NJ: Barnes & Noble, 1981) 41.

10.ジェントル・ウーマンの伝統的な強さについては、Ann S. Haskell, "The Portrayal of Women by Chaucer and His Age," *What Manner of Woman*, ed. Marlene Springer (New York: New York UP, 1977)を、目下のもの、困窮した者への配慮に関しては、David Roberts, "The Paterfamilias of the Victorian Governing Classes," *The Victorian Family*, ed. Anthony Wohl (London: Croom Helm, 1978)を、又学識の高さ（特にエリザベス一世の宮廷において）に関しては、Doris Stenton, *The English Woman in History* (New York: Macmillan, 1956) 120-50を参照されたい。

11. Alice Chandler, *A Dream of Order* (Lincoln: U of Nebraska P., 1970) 12.

12.David Castronovo, *The English Gentleman* (New York: Ungar, 1987) 12.

13.Shirley Robin Letwin, *The Gentleman in Trollope* (Cambridge, MA: Harvard UP, 1982) 8.

14.Asa Briggs, *Victorian People* (1954; Harmondsworth: Penguin, 1980) 106.

15. F.M.L. Thompson, *English Landed Society in the Nineteenth Century* (London: Routledge & Kegan Paul, 1963) 129.

16.英国人のgentriphiliaには、英国では地主階級が大陸の特権階級程寄生虫的ではなく、ノーブレス・オブリージを理想としていたことに加え、企業家精神を持っていたことも貢献しているが、その理由としては長男相続制が挙げられる。財産を相続できない次男以下の男子を自立させるべく手立てを講じたり、娘達に高額の持参金を用意し良縁を結ばせるには、勤勉にならざるをえないばかりか、収穫を左右する小作人の健康状態に留意する必然性が生じたのである。詳細はDavid Landes, *The Unbound Prometheus* (1969; Cambridge: Cambridge UP, 1989) 66-70参照。とはいえクローフォード兄妹の様に支配階級の義務を怠った地主も多かったのは言うまでもない。

17.Martin J. Wiener, *English Culture and the Decline of the Industrial Spirit 1850 - 1980* (Harmondsworth: Penguin, 1981) 127-54.

18.James R. Kincaid は *Doctor Thorne* で描かれている二つの階級の融合を, *The Novels of Anthony Trollope* (Oxford: OUP, 1977)114頁で "blood restoration" と称している。

19.Tony Tanner, *Jane Austen* (Cambridge: Harvard UP, 1986) 148.

20.*Doctor Thorne* では労働者階級の母が名門出身の父に犯され産んだ娘が、ホイッグの価値観に汚染され没落寸前の旧家の長男と結婚し、財を成し爵位を得た母の兄の遺産で婿家を救うと共に、そのトーリーの伝統を復活させる。*Framley Parsonage*では、医師を父に、牧師を兄に持つ娘が、やはりホイッグの影響を受けトーリーの伝統が腐食しかかっている名門に、田園社会の伝統を復活させる。*The Last Chronicle of Barset* では極貧の聖職者の娘が、バーセットシャーの "clerical aristocracy" に迎えられ、"blood restoration" の聖職者版となる。*Middlemarch*では差配の娘が、怠惰な市長の息子が "respectable farmer" になるのを助け、二人は一生幸せにカントリー・ハウスで暮らす。*Bleak House* のヒロインは私生児であるが、由緒ある家柄の医師と結ばれ、長閑な田舎の新しい荒涼館の夫人となる。このカントリー・ハウスの継承者の資質を問う作品は20世紀にも現れ、Forster の*Howards End, A Room with a View,* そして Waugh の *A Handful of Dust, Brideshead Revisited* がその範疇に入れられよう。もっとも、時代が下るにつれ伝統は重荷となり、それを継承する女性像も変容するのは否めない。

Fanny Price と Molly Gibson－
カントリー・ハウスの伝統を継承する
ヒロイン達

Fanny Price and Molly Gibson:
Bearers of the Country House Tradition

東京家政学院筑波短期大学
波多野葉子
Yoko Hatano
Tokyo Kasei Gakuin
Tsukuba Junior College